

嵐山行楽図 木米

紙本墨画 縦三〇・七横六六・八 文政八年（一八二五）

個人蔵



軸首

文政八年（一八二五）二月、木米五十九歳の作で、渦まくような流雲、仏塔、樹木、そして橋を渡る二人の人物が墨一色で描かれている。画面左側の款記には「乙酉春仲、浪花茶伯と平安陶工、貝川の激湍に向い、花間雲中に茶を瀾る。花月君の為に図す。聾米」（原文は漢文）とある。「浪花茶伯」と「花月君」は同一人物であり、大坂で煎茶花月菴流を創始した田中鶴翁（一七八二〜一八四八）を、「平安陶工」は木米自身を示す。「貝川」は詳細不明だが、京都の桂川かその支流を意味するものと推測されている。つまり文政八年二月、花月菴鶴翁とともに「貝川」の激しい流れを望みながら「花間雲中」で煎茶を楽しんだ思い出を、花月菴鶴翁の為に描いたことが判明する。

この款記を踏まえると、橋上の点景人物は花月菴鶴翁と木米であり、彼らの視線の先に悠然と広がるのはまさしく「満開の桜が咲き誇り、雲が沸き立つ」春爛漫の嵐山の景と推測される。どこかとぼけた味わいのある簡略な風景図だが、生き生きとした思い出を共有した友人へ贈るには十分な内容であったに違いない。

なお、現在のような掛軸装に仕立てられた時期は不明であるが、本作には「木米」重郭楯円印を捺した陶製の軸が左右に用いられており、木米の絵、書、陶を同時に鑑賞する楽しみのある作品ともなっている。

（サントリー美術館 久保）

款記…乙酉春仲浪花茶伯與平安陶工／向貝川激湍瀾茶于花間雲中圖／爲／花月君／聾米

【参考文献】 河野元昭「木米筆 嵐山行楽図」『國華』一四一三号 二〇一三年七月